ボールパークからストリートへ：
ベースボール型競技におけるアーバンスポーツ化の力学

Baseball Exchange to Ball park to Street :
Machanics of Urbansports in Baseball Type Sports

三谷　　舜*

はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により 1 年延期された 2020 東京オリンピックでは、男子の野球、女子のソフトボールが復活し、実施された。そこでは、日本の期待通り、両競技で金メダルを獲得する結果となった。また、サーフィン、スケートボード、スポーツクライミング、BMX フリースタイル、バスケットボール 3 × 3 などのライフスタイルスポーツも追加された新競技・種目として、注目された。

日本国内では、次回のパリで野球・ソフトボール競技が再び除外される「落胆」と同時に、ライフスタイルスポーツへの関心の高まりも同時に見てとれる。その象徴として、東京パラリンピックの期間中、ファンパークに設置されたスポーツ体験コーナーで「ベースボール型競技の第一歩」[1] と位置付けられる「Baseball 5」を実施できるようなプログラムが用意されていた。

Baseball 5[2] とは、世界野球ソフトボール連盟（WBSC）により作られた、新たなベースボール型競技である。この Baseball 5 は、2022 年 11 月には 7 日間の日程で「第 1 回 WBSC Baseball 5 ワールドカップ」がメキシコ・メキ

＊中京大学スポーツ科学部任期制講師

シコシティで開催された。その大会には、キューバ、香港、日本、リトアニア、メキシコ、南アフリカ、チャイニーズ・タイペイ、フランス、ケニア、韓国、チュニジア、ベネズエラの 12 カ国が出場した。

WBSC 及び IOC は Baseball 5 の推進に力を入れており、2026 年にセネガル・ダカールで開催されるユースオリンピックの実施種目となることが決定している。2024 年のパリオリンピックでブレイキン（ブレイクダンス）が実施種目となっているが、2018 年に実施されたブエノスアイレスユースオリンピックでブレイキンは初めて実施種目として選定された。そうした道筋を踏まえると、WBSC 及び IOC が Baseball 5 をベースボール型競技として置き換えようとする思惑が見え隠れすることも否定できない。[3)]

清水諭（2005）は、2005 年 7 月 8 日に開催された IOC の会議において、男子野球、女子ソフトボールの両競技が 2012 年のロンドンオリンピックで除外される決定が下されたことを受けて、次のように課題を整理した。

> 私たちは野球というカルチャーをどのように受け止めればいいのだろうか。楽しくて、面白いから、無抵抗のまま受け入れることに終始するのか。アメリカの支配に対して抵抗しつつ、野球というカルチャーを国内に向けてのみ作り上げていくのか。日米が協力して、オリンピックにおける野球とソフトボールの存続を IOC に訴えていること。あるいは「ワールドカップ」の開催がさまざまな組織から提案されていること。野球の行く末をめぐって、さまざまな課題が次々に湧いてきている。[4)]

こうした課題に対し、WBSC が組織され、男子野球と女子ソフトボールはセットで復帰を目指し、また Baseball 5 が作られるに至った。そこで本論文は、オリンピックを中心としたスポーツに広まっている「アーバンスポーツ」という概念が旧来から実施されている近代スポーツに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。この目的を検討することがひいては、「スポーツ

の都市化」および「アーバンスポーツ」がスポーツを「する」、「みる」上でそれぞれの主体にどのように影響するのかということを検討することにつながる。

そのために、まず、近代スポーツである旧来のベースボール型競技の競技場―ボールパーク―の特性を整理する。次に、スポーツに生じている新たな潮流である「アーバンスポーツ」から誕生したベースボール型競技「Baseball 5」の特性を、源流である「クアトロエスキナス（Cuatro Esquinas）」から順に整理する。最後に、三谷舜（2022）が論じているライフスタイルスポーツの競技化に関する検討による「環境の用具化」という点に着目し、近代スポーツのアーバンスポーツ化による影響を明らかにする。

第１章　ベースボール型競技における「ボールパーク」：近代スポーツの空間と場所

本章では、ベースボール型競技を実施する際に利用されることの多い野球場を例に、近代スポーツにおいて空間と場所がどのような効果を持っているかを明らかにする。とりわけ、近年では野球する場のみを建築するにとどまらず、付随する競技施設や周辺の公園整備、道路計画、管理運営などのソフト面までを含めて、「ボールパーク化計画」などという事例も見られる。[5)]

石原豊一（2021）は、「ボールパーク」という言葉について、「本来的には、球場、スタジアムの別称である。しかし、近年、我が国においては、単なるスポーツ観戦の場としてのスタジアムを超える新たなエンタテインメント空間というイメージでとらえられることが多い」[6)] と述べる。

このイメージにそぐう例として、ベースボール型競技の母国と言われるアメリカの野球リーグ「メジャーリーグベースボール（MLB）」において、7 回に入る際に歌われる「Take me out to the ball game（私を野球に連れてって）」がある。

Take me out to the ball game　Take me out with the crowd
私を野球の試合に連れていって　私を群衆と一緒に連れていって
Buy me some peanuts and Cracker Jack　I don't care if I never get back
私にピーナッツとクラッカー・ジャックを買ってね　戻れなくてもかまわないよ
Let me root, root root for the home team　If they don't win it's a shame
ホームチームを応援させてよ　もし勝てないなら情けないよね
For it's one, two, three strikes you're out　At the old ball game
さあ1、2、3ストライクでアウトだ　昔ながらのボールゲームで

MLBの試合では、この歌は「ストレッチ・ソング」と言われており、7回

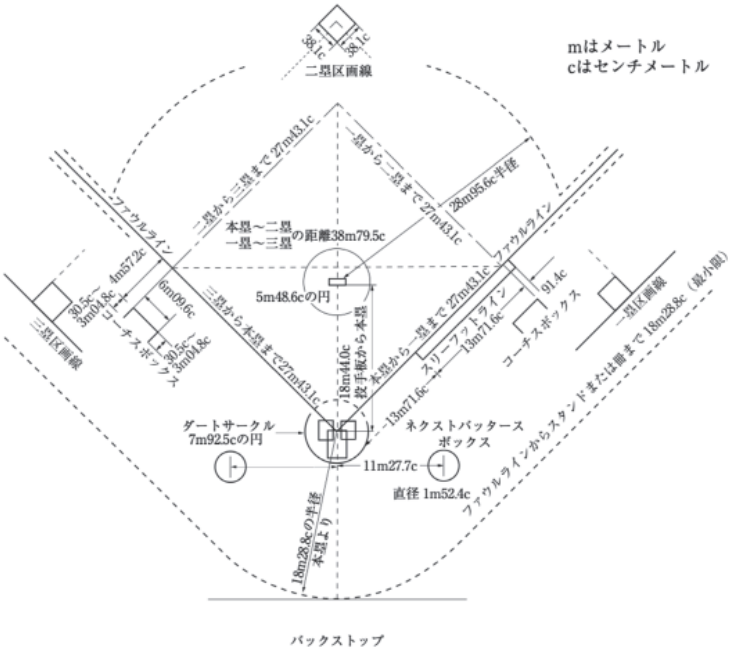

図1　野球場の区画線[8)]

に入ると球場の観客が立ち上がり、この歌を大合唱する。[7] 歌う際は、ホームチームもアウェーチームも関係なく、立ち上がって大合唱となる。

この歌の不思議な点は、野球場へ連れて行ってほしいという動機が直接的に表現されず、球場で購入できる食べ物や、ホームチームを応援するということが目的とされていることである。ここから、競技を際立たせるために応援・物販・人的交流などが複合的に作用する空間として「ボールパーク」が成立していると言えよう。さらにいうと、「ボールパーク」は、野球のルールが適用される空間であり、野球をする側も見る側もそのルールに則って勝敗を決し、それに一喜一憂するのである。

そこでまず、野球における競技場の型を確認しておきたい。下に示したのは、『公認野球規則』に定められた競技フィールドの距離を図示したものである。これに加え、ファウル地域横のフェンス、外野フェンスが合わさり、野球場となる。

このように、公認野球規則により競技フィールドが定められ、各主催連盟により収容人数の目安や環境整備の指針が示されている。各主催連盟により収容人数の目安や環境整備の指針以外の規則については、もちろん一般のプレイヤーや愛好家にも適用される。つまり、少なくとも野球の試合をレギュレーション[9] 通りに行おうとする以上は、上記の距離を満たした場を準備する必要性がある。

場の準備については、上述のフィールドが描ける何もない広場があれば、最低限の競技を行うことができる。だが、日本における野球競技がポピュラーな位置にあることや、競技人口が成人が推計で 1,308,711 人、中学校運動部活動で 166,800 人、高等学校運動部活動で 161,939 人となっている[10] ことを考えると、常設の野球場をしつらえておく方が効率的であり、広く市民のニーズに応えられる、と見立てられることが予想できる。

そうしたことに伴って、野球・ソフトボール場の数は 6,123 箇所、学校体育スポーツ施設で野球場・ソフトボール場が整備されている数が 1,701 箇所

となっている。[11] 合計すると 8000 箇所近くの野球場・ソフトボール場が全国に整備されていることになるが、このようなすでに整備されている「ハコモノ」を活用して、地域を盛り上げる、いわゆる「町おこし」のために野球チームを誘致する動きもある。[12]

こうしたスポーツ空間や場を整備することの必要性は、「スポーツする空間の限定」や「スポーツのルールが適用される空間の明確化」などが、近代スポーツの実施には必要となるからである。ベースボール型競技においては、内野、外野、ホームラン、ファウルボール、走塁の順序など、空間の限定を伴ってルールによりプレーやプレー空間を定義づけることが多い。

スポーツにおける空間に意味合いの変化について、早川武彦（1993）は、スポーツの形成史として以下のような表に整理している。近代以降のスポーツでは、「統一ルール」、「統一組織」が形成され、それらに「競技方法は勿論のこと試合場や試合時間も決められ」[13] ると指摘する。つまり「生活空間・時間から全く切り離したスポーツ空間をルールのもとに創り出した」[14] と言えるのである。

表１　スポーツ形成史概観 [15]

	～古代	～中世	～近代	～現代
場：競技、組織、空間	村落を取り巻く空間	都市の内部的空間	生活地域内的空間	ドーム・人工的空間
自然環境	自然と共生･対峙	自然離脱	自然の社会化	自然の人工化・共生化
道具	道具	道具の用具化	用具の技術化	技術の効率化・行動化・多様化
人：組織、競技者	村落集団、生活的集団	地域・国内・ギルド的仲間	国内・国際、クラブチーム	国際組織、多国籍チーム、専門家集団、個別化・小集団化、観衆
取り巻き（周辺行動）	取り巻き	はやし立て、賭	応援・観衆、賭（公営）	賭（公・民＝企業化）

早川武彦（1993）は、現代のスポーツを上述したように概観する一方で、

「自らの生活に密着させたスポーツ活動が盛んになってきている」と述べる。このことは、近年のライフスタイルスポーツの台頭にも明らかである。また、ライフスタイルスポーツがIOCの唱える「アーバンスポーツ」の概念に則り変化していることからも、「現代のスポーツはまさにファジーな日常空間」であり、「闘争のアリーナ」となっていると言えよう。

第2章　ストリートに繰り出すベースボール：Cuatro Esquinas から Baseball 5 へ[16)]

前章では、「ボールパーク」について、「競技方法は勿論のこと試合場や試合時間も決められ」[17)]る空間であり、それは「生活空間・時間から全く切り離したスポーツ空間をルールのもとに創り出した」[18)]ものであることを確認した。本章は、アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」の形態を示す。

Baseball 5は、2018年に欧州やアフリカ諸国の野球・ソフトボール競技人口の低下に歯止めをかけるために考案された競技である。世界野球ソフトボール連盟（World Baseball Softball Committee）会長のリカルド・フラッカリ（Riccardo Fraccari）[19)]は、以下のように述べる。

> Baseball 5は5人制、5イニングからなる野球・ソフトボールの簡単で新しいストリート競技である。手軽に街中で楽しめるこの競技が広がれば、これまで開拓できなかった地域や場所にも野球とソフトボールを広めることができるだろう。[20)]

新たに発明されたBaseball 5は街中で楽しめる競技であり、手軽なものであるとされているが、ベースに準じるものや区画線など、「場」の準備は必要となる。カリブ海に面したキューバでは、Baseball 5が登場する以前から、

「クアトロエスキナス」(Cuatro Esquinas) と呼ばれる、ストリートベースボールが行われていた。本章では、まず「クアトロエスキナス」の整理から出発したい。

動画共有サイト「YouTube」にある Olympics の公式チャンネルには、「Cuatro Esquinas: The Basics of Street Baseball In Havana | Arriba Cuba」(クアトロエスキナス:ハバナにおけるストリートベースボールの基本) [21] という動画で、クアトロエスキナスが紹介されている。以下に、動画内で解説者が述べている解説を文字起こしし、クアトロエスキナスのスタイルを紹介する。

0:02 ストリートベースボール－キューバ・メソッド
0:20 子供の時から僕らはいつも 野球が大好きだった
0:24 貧困が原因で野球を止めることは出来なかった
0:28 (だが) グローブもボールもバットも持ってはいなかった (ので)
0:31 布を使ったり
0:33 石といくらかのセロテープなど
0:36 何でも見つけられるもの
0:37 それでボールを作った
0:39 一つの例を見せましょう
0:42 石を一つ手にとって
0:44 布の生地を手にとって
0:45 そして周りに巻くのです
0:49 出来る限り丸くなるようにします
0:52 石が重みを感じさせてくれるので
0:55 投げられるようになり
0:57 それでバットで打った時によく回転するのです
1:00 糸かロープを使ってボールを結びます

1:03 それから結んだボールをテープでカバーします
1:14 素手で掴むことが出来るようにです
1:16 グローブがなくても痛くはないのです
1:19 野球をやって凄く楽しみました
1:23 我々の野球への愛がどんどん大きくなり
1:49 何の問題も野球をすることから私達を止める事はなくなった
1:52 野球は国の競技です
1:53 今までもそしてこれからも、ずっとそうです
1:56 ストリートベースボール－キューバ・メソッド[22)]

この動画内では、0:31 からボールの作成方法について解説される（図 2 右上）。そこで作成されたボールは、枝などの棒切れに代用されるバットで打つことで打撃をおこなっている（図 2 右下）。このようなボールとバットで行われるクアトロエスキナスは、狭い路地で行われており、路地の壁沿いにベースの代用として石や草、バケツなどで各ベースをマーキングする。そし

図 2　Olympics 公式チャンネルによるクアトロエスキナスの紹介

て守備と攻撃に分かれ、競技を進めていく。

このクアトロエスキナスは、明確なルールや区切られた競技場を持たない。その時々に集まった仲間で、その時に使える場所に応じた「アレンジ」に基づいて競技を進める方法が決められていく。まさしく、DIY（Do It Yourself）精神により、進められていくのである。さらに、クアトロエスキナスは児童期のみの遊びに留まらない。下に示す図3のように、身体の大きな年代においても、行われている遊びであることがわかる。

図3　クアトロエスキナスの様子 [23)]

この動画の場合は、図3左上の右から2人目、大きく手を広げているのが打者である。この打者は、おそらくゴム製であると思われるボールを手で打撃する。そして、図3右上では大きく奥までボールを飛ばし、右回りで走塁する。図3左下ではクロスプレー（捕手と走者の接触を伴うプレー）となるが、捕手が捕球しきれず、セーフとなった。

図2の動画と図3の動画の大きく異なる点は、バットの有無とそれに伴ったボールの種類である。図3ではバットを使わずに手で打つ必要があり、そ

のためには図2の動画で使用していたような石を芯にしたボールを使用するわけにはいかないのである。そのため、ソフトテニスボールのような柔らかいボールにより競技を行う必要がある。

こういった違いにも明らかなように、街かどで偶発的に行われる遊びであるクアトロエスキナスは、明確なルールや区切られた競技場を持たずに、その時々に集まった仲間で、その時に使える場所に応じた「アレンジ」に基づいて競技を進める方法が決められていくのである。

2010年には、エナジードリンク販売を手がけるRed Bull社[24]が「The Cuban version of baseball - Red Bull 4Skinas」という動画を出し、Red Bull社がおこなったクアトロエスキナスの大会の模様を紹介している。以下に、解説の文字起こしを紹介する。

0:21 キューバ人なら誰もがフォローするスポーツだと思う。ここキューバでは。
0:25 朝食、昼食、夕食、すべて野球と一緒なんです。
0:52 文字通り、4つのコーナ。4skina.
0:54 私たちが4skinaを始めたのは、8歳のときだった。
0:57 近所の隅っこで遊ぶから4skinaと名付けられた。
1:02 4skinaはストリートゲームだ。
1:04 ゴムや布のボール、または瓶の蓋でプレイする。
1:08 ミットではなく、手でプレイする。
1:11 バスケットボールコート、サッカー場、野球場など、どこででもプレイできる、リビングルームでもミニ4skinaができる。
1:18 このイベントは、キューバにこのゲームが存在することを示す機会だから、感謝したいんだ。
1:22 テニスボールの布を取ると、ボールが遅くなるから、もっと弾むようにするんだ。そうすることで、より良いボール遊びができる

んだ。

(ここよりラップ部分)

1:34 ラシエル・ザ・ロックが飛び出した。ほら、今度はオレの番だ。

1:38 俺はお前のために行く、引き分けはない。最強はここにいる、出撃だ、無茶を言うな。

1:44 動くな、騒ぐな 自分がどこにいるのかわからなくなる。自分を際立たせるブランドが必要だ

1:50 この国では弱いものではやっていけない。これがなくならないように私は戦う

1:55 bread を食べろ、そして食べるな ... 歩け、感じろ ラシエル・ザ・ロック、楽しめ。

2:00 エスパルタコス、良い子達よ ..... 楽になれよ ..... お前を黙らせることもできる、自分をきれいにするんだ。

(ここまでラップ部分)

2:57 通常、各チームには 4 人の選手がいる。フィールドに 3 人、一塁に 1 人いる。

3:06 塁に進むには歩かなければならない。走るとアウトになる。

3:30 キャリアを 4skina で始めたのだが、なぜかこのゲームから代打が台頭してくるかもしれません。これは攻撃的なゲームで、私たちはそれを楽しんでいます。

3:37 クリーンナップ・バッター、兄弟。

3:38 オールドハバナ [25)]

Red Bull 社によるクアトロエスキナスは、大会として実施するにあたり、競技を区画を明確にし、得点板やベースなど、専用の用具を用意した。それらの用具は、ストリートファッション性の高いものであり、「ストリートゲーム」としてのクアトロエスキナスの世界観を保持している。また、ルールも

明確化されている。各チーム 4 名の選手で構成され、1 塁手として 1 名、フィールドプレイヤーとして 3 名の計 4 名が守備者となる。攻撃は 4 名が順番に打撃を行う。

Red Bull 社によるクアトロエスキナスから 8 年後の 2018 年、WBSC は、欧州やアフリカ諸国の野球・ソフトボール競技人口の低下に歯止めをかけるために Baseball 5 を発表した。以下より Baseball 5 の競技的特徴を整理する。

環境や用具の側面については、第一に、フィールドサイズが大きく縮小されていることが特徴である。1 辺が 21m の正方形があれば競技場が作れるようになっており、そのうち内野が 1 辺 13m の正方形である。野球よりコンパクトな場所で行われるソフトボールの内野の 1 辺が 18.29m であることと比較しても、とても小さい面積のフィールドでプレイされることがわかる。

フィールドの面では、他にも工夫が加えられている。それは、競技場を区切るフェンスに行われている。野球やソフトボールでは、成人の身長より高いフェンスに囲まれた「球場」でプレイする。対して、Baseball 5 では、100cm 程度のフェンスで四方を囲むのみとなっている。この低いフェンスにより、競技場の周囲との境界が曖昧になり、都市に「溶け込む」ような効果があると考えられる。

つぎに、用具の面で工夫が加えられている。Baseball 5 で使用される用具は、ベースとボールのみである。バットは使用されず、てのひらか拳でボールを打つ。WBSC 及び各国競技連盟（IF）が主催する大会では、Baseball 5 の意匠が施されたフェンスやウォール状のものが設置されている。

ベースは、内野の 4 隅に設置する。その際、地面に設置するものでなくとも、マークして判別がつくようにするだけでも良い。また、通常の野球やソフトボールであれば本塁の左右に設置される打者席（Batter's Box）は、Baseball 5 では本塁の後ろ側に 300cm 四方の場所が打者に与えられ、その中で打撃動作を行う。

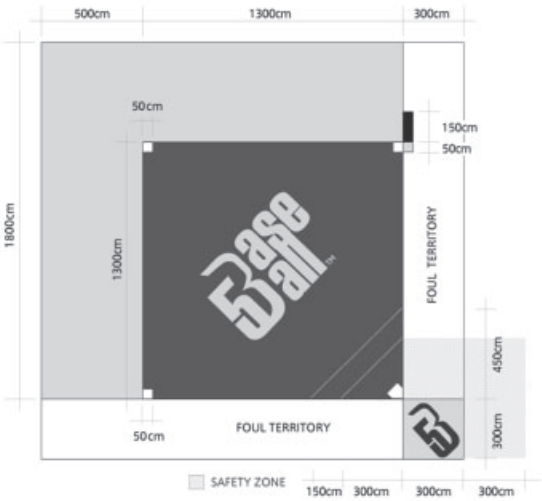

図 4　Baseball 5 のフィールド設計図 [26)]

ボールについては、Baseball 5 の紹介文において、「ゴムボール（rubber ball)」と呼ばれているものが使用される。WBSC が主催する大会においては、公式規格に則って製造され、検定に合格したものが公式球として使用される。

次に、試合の進め方に関するルールを整理する。進め方の大枠は従来のベースボール型競技と同じく、攻撃側が 3 つアウトを重ねると攻守交代となる。それを両チーム 5 回ずつ（5 イニング）行い、1 試合となる。1 チーム 8 人で構成され、フィールドには 5 名が立ち、3 名は控え選手となる。投手と捕手は置かずに、フィールド内のどこでも好きな位置を守ることができる。

攻撃は 5 人の出場選手が順次打撃を行うことで進んでいく。打撃は打者席内で行う。打者が手に持っているボールを掌か拳で強く打ち、本塁から 3m 以上離れた位置で打球を一度ワンバウンドさせる必要がある。この点で、従来のベースボール型競技はバットを使って遠くに強い打球を放つことを攻

撃側は目指すが、Baseball 5 では、バットを使わずに、「手打ち」でフィールド内におさまるようにワンバウンドの強い打球を放つことをルールで規定している。つまり、コンパクトなフィールド内でプレーを完結させられるように、ルールで打球の種類を限定しているのである。

下に整理した表 2 のように、クアトロエスキナスから Red Bull 社の大会を経て、Baseball 5 に至るまで、ルールが明確化されたり、スポーツの場やフィールドが限定されたり、用具が専用化されたりと、近代スポーツとしての形を帯びていったことが明らかである。

表 2　クアトロエスキナスから Baseball 5 への変化

	Cuatro Esquinas	Red Bull Cuatro Esquinas	Baseball 5
ルール	曖昧	大会用ルール	国際統一
フィールド	曖昧 （ストリート）	大会用フィールド （都市の空き地）	規格がおさまればどこでもプレー可
チーム	流動的	大会用登録	NF の規定に則り結成
出場メンバー	流動的	4 名（ルールで規定）	5 名
用具	その場で作成・入手したボール、バット、ベース	ボール、ベース （テニスボールや木材を加工）	ボール、ベース、フェンス （検定・規格に合うもの）

ここまで見たように、アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」には、キューバで取り組まれていたストリートスポーツ「クアトロエスキナス」との連続性があった。その連続性とは、手打ちでの打撃、グラブを使わない守備といったプレースタイルに関するものや「都市空間に溶け込む」といった競技のイメージと関わるものだった。だが、クアトロエスキナスから Baseball 5 へと「競技化」される過程では、クアトロエスキナスが持っていたストリートスポーツとしての「曖昧さ」は失われ、画一的なルール、均質化された用具などに則って実施されるようになった。

次章では、さまざまなスポーツがアーバンスポーツ化される際に観測され

る「環境の用具化」[27] に着目して、近代スポーツのアーバンスポーツ化について検討する。

第３章　近代スポーツの「アーバンスポーツ化」がもたらすもの：スポーツの都市化と「環境の用具化」

前章では、クアトロエスキナスから Baseball 5 へと変容する過程と内実を明らかにした。本章では、その過程と内実を踏まえて、スポーツがアーバンスポーツ化される際に観測される「環境の用具化」[28] に着目することで、近代スポーツのアーバンスポーツ化について検討したい。

オリンピックで実施されたり、運動部活動の競技に選定されたりする近代スポーツは、専用の場所や専用の道具が必要である。そうした性質に加え、世界標準のルールやレギュレーション、それらを決定する機関なども準備されなくてはならない。アレン･グットマン（Allen Guttmann）は､近代スポーツは７つの指標により構成されているとした。表３に示すものがそれにあたる。

表３　近代スポーツ７つの指標 [29]

① 世俗化	宗教的な儀礼からの解放
② 平等化	参加機会と競技条件が性別、人種、宗教、階級などに左右されない
③ 役割の専門化	多種目化、ポジション制、監督、コーチなどの分業
④ 合理化	ルールや設備の標準化、トレーニングの科学化
⑤ 官僚的組織化	地域 - 国家 - 世界と高度に組織化された競技の統括組織の形成
⑥ 数量化	時間、空間、記録の詳細な数値による定量化
⑦ 記録万能主義	詳細な数値により定量化された記録による競争

前章の表2で整理したクアトロエスキナスからBaseball 5への変化についても、Baseball 5として整備されるにあたって、これら7つの指標が踏まえられていることは明白である。つまり、クアトロエスキナスからBaseball 5への変化（＝競技化）はストリートスポーツから近代スポーツへと変化する過程に他ならないのである。

しかし、近代スポーツ化するにあたって、Baseball 5に専用の競技場が建設されるということはなかった。それは、ストリートスポーツを競技化する際に、国際オリンピック委員会（IOC）が唱えた「アーバンスポーツ」という考え方に影響を受けている。

アーバンスポーツについて、市井吉興（2019）は、①都市化されたスポーツの中でも、普段から都市部で実施されているライフスタイルスポーツや、会場設営を工夫することで実演可能であるという形態、②若者をオリンピックとオリンピックムーブメントに引きつけるという狙いに加え、③恒久的でないスポーツ施設の設置を通じて、スポーツを都市開発の資源とするという意味がある、と指摘する。[30] この考え方は、近代スポーツであるベースボール型競技をアーバンスポーツとしてデフォルメする際にも、十分に活用されている。そのため、Baseball 5のフィールドはコンパクトで簡単に設営・撤収ができるようになっている。また、フィールドが十分に用意できなくとも競技が実施できるようにルールが工夫されている。三谷舜（2021）はBaseball 5の持つ特性や狙いについて、「「若者を引きつける」、「スポーツを都市開発の資源にする」という狙いがある。また、Baseball 5は、「都市部で開催可能なように工夫したフィールドで行う」という特性も持つ」[31] と指摘する。

Baseball 5のように近代スポーツがアーバンスポーツへと変化していく際には、「環境の用具化」が発生している。三谷舜（2022）は、パルクールを例に「環境の用具化」について次のように述べる。

「環境の用具化」は、パルクールの実践環境に必要な障害物を用具化す

ることで、パルクールの実践環境をどこでも作れるようにすることであった。この点は、競技化されたパルクールにおいては、均一的な競技環境を提供するという近代スポーツ化の側面があり、非競技的なパルクールでは私有地で合法的にパルクールを実践することで締め出されるリスクを回避するという側面を持っている。[32)]

言い換えると、スポーツを実施する環境を用具化することで、スポーツ実施環境をどこでも設けられるようにすることである。また、その場その時に応じて展開されるという、ストリートスポーツの特質を消し、均一的な競技環境により近代スポーツとしての条件も担保できるようになることも指摘できる。

ベースボール型競技と Baseball 5 においては、以下のように分析できる。①ベースボール型競技を実施する環境のうち、内野フィールド及びベースを用具化し、外野フィールドやその他構造物を不要にした。②バットを使用せず、ボールのみで実施できるようにした。また、この 2 点により、競技環境が均一化され国際的に試合が行えるようになった。また、遊びの要素が強く非競技的だったクアトロエスキナスでは、公道や私有地などでゲームを行う影響で、その場から締め出されるリスクがあったが、競技環境が均一化されたことにより、場を確保する際の目安が把握でき、締め出されるリスクを回避しやすくなったといえる。

このように、「環境の用具化」を経て、実施しやすいベースボール型競技が誕生したことは明らかであるが、その過程で、ベースボール型競技の持つ「おもしろさ」やストリートスポーツの「特質」が失われていることにも目を向けなければならない。Baseball 5 が切り捨てたベースボール型競技の持つ「おもしろさ」とは、バットでボールを打つ動作、それに付随した、打者と投手の駆け引きがある。失われたストリートスポーツの「特質」としては、「曖昧さ」が挙げられる。この失われた「曖昧さ」は、Baseball 5 のみなら

ず、スケートボードやウォールクライミング、パルクールなど、さまざまなライフスタイルスポーツがアーバンスポーツ化する際にも指摘できることである。

本章の検討より「環境の用具化」は、ライフスタイルスポーツのアーバンスポーツ化を超え、近代スポーツのアーバンスポーツ化にも観測されることが確認された。言い換えると、アーバンスポーツへと技を作り変える際に「環境の用具化」は重要な要素となっている可能性があると考えられる。

おわりに

本論文は、オリンピックを中心としたスポーツに広まっている「アーバンスポーツ」という概念が、旧来から実施されている近代スポーツに及ぼす影響を明らかにすることを目的としていた。以下、各章の議論を振り返りつつ、今後の展望を示したい。

第 1 章では、ベースボール型競技を実施する際に利用される多い野球場を例に、近代スポーツにおいて空間と場所が持つ効果を検討した。そこでは、近代スポーツにおける場はルールが適用される空間であり、スポーツをする側はそのルールに則って勝敗を決し、見る側はそれに一喜一憂する空間となっていた。そういった性質は、ルールにより「競技方法は勿論のこと試合場や試合時間も決められ」[33] ることとイコールである。つまり「生活空間・時間から全く切り離したスポーツ空間をルールのもとに創り出した」[34] とことが確認された。

第 2 章では、アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」には、キューバで取り組まれていたストリートスポーツ「クアトロエスキナス」との連続性があったことが確認された。その連続性とは、打撃や守備などプレースタイルに関するものや「都市空間に溶け込む」といった競技イメージと関わるものだった。だが、クアトロエスキナスから Baseball 5 へと

「競技化」される過程では、クアトロエスキナスが持っていたストリートスポーツとしての「曖昧さ」は失われ、画一的なルール、均質化された用具などに則って実施されるようになったことも明らかになった。

第3章では、近代スポーツがアーバンスポーツへと変容する過程の内実を、「環境の用具化」に着目して明らかにした。そこでは、「環境の用具化」により、容易にプレーできるスポーツへと変化した一方で、近代スポーツの「おもしろさ」とストリートスポーツの「曖昧さ」を切り離していることが確認された。

本論文内で検討したことを踏まえると、本論文の目的としていた、オリンピックを中心とした近代スポーツに対してIOCが唱える「アーバンスポーツ」が及ぼす影響を「環境の用具化」という観点から明らかにすることに対しては、一定の回答が為せたと考えられる。だが同時に、重要な論点を残したままであることも指摘しておきたい。

その論点とは、近代スポーツのアーバンスポーツ化の「必要性」とステークホルダーの解明である。近代スポーツより前にアーバンスポーツ化の波にさらされたライフスタイルスポーツについて、市井吉興（2020a）は「単なるスポーツというアクティビティではなく、当事者たちの政治的なコミットメントも含めたライフスタイル、つまり、「生き方」を表現するプラットフォーム」[35]という側面を持つと指摘する。この側面はアーバンスポーツ化され競技化が進むにつれて薄れていくことが考えられる。なぜならば、Palmer and Larson（2015）が指摘するように、オリンピックでの実施競技を「入れ替える」ことを通じて、IOCは「美的感覚」を潜在的に表明し、オリンピックを「流行の競技スポーツのパレード」と化してしまうからである。[36]そのパレードの1つとしてアーバンスポーツ化された流行スポーツが取り込まれるのである。このような近代スポーツのアーバンスポーツ化の「必要性」とステークホルダーの解明という点については今後の課題として提示しておきたい。

注

1）WBSC「Baseball5 to be showcased at Tokyo 2020 FAN PARK during Paralympics」https://www.wbsc.org/en/news/baseball5-to-be-showcased-at-tokyo-2020-fan-park-during-paralympicspics（最終閲覧日 2022/12/22）
2）競技の詳細な説明については、本論文第 2 章および三谷舜（2021）を参照。
3）三谷舜、2021
4）清水論、2005、10-11 頁
5）杉本尚次（1999）は、みる野球という視座より野球場を検討し、「祝祭空間ともいえるスタジアム（ボール・パーク）」というように表現した。同論文の中で杉本尚次は、祝祭空間の構築には、エリア・アイデンティティを充足させる機能や社交的空間の機能、その空間で実施されるスポーツのプロフェッショナル化が要素として存在することを、日米の比較から指摘している。（杉本尚次、1999、1-19 頁）
6）石原豊一、2021、39 頁
7）この歌は現地で演奏されており、ライブさながらの盛り上がりを見せる。他の球場内演出についても、一部を除き生演奏である。https://vt.tiktok.com/ZSR5hFfuM/
8）（公財）全日本軟式野球連盟、https://jsbb.or.jp/docs/47c0a44749c48aa0e32f95f8540141b22a6c030f.pdf（最終閲覧日 2022/12/01）
9）関朋昭（2020）は、ルールとレギュレーションの関係について、「「ルール」は「規則、規定、きまり」、「レギュレーション」は「取り締まり、規制、規則」と同じ含意であるが、スポーツにおいて「ルールブック」とは言うが「レギュレーションブック」とは言わず、また「ルール違反」とは言うが「レギュレーション違反」とは言わない。つまり「ルール」は競技全体に関わる部分で、その中でも特に道具、交代人数、試合時間などの仕様に関する部分がレギュレーションである。」と述べる。（関朋昭、2020、pp.121-122）本稿では、競技場の距離についても競技の「仕様に関する部分」に含まれると考え、レギュレーションの範疇であるとする。
10）笹川スポーツ財団、2020、51 頁、108-109 頁
11）笹川スポーツ財団、2020、61 頁
12）石原豊一、2017
13）早川武彦、1993、22 頁
14）早川武彦、1993、22 頁
15）早川武彦、1993、20 頁より、一部筆者改変
16）本章は、三谷舜、「「スポーツの都市化」が近代スポーツに与えるインパクトとは？：アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」の考察」、立命館大学人文科学研究所紀要 126、2021、147-170 頁にて展開した議論をベースに、Baseball 5 の形態を紹介するために加筆修正をおこなった。
17）早川武彦、1993、22 頁

18) 早川武彦、1993、22 頁
19) リカルド・フラッカリ（Riccardo Fraccari）は、1949 年 5 月 30 日にイタリア・ピサで生まれた。1985 年よりイタリア野球ソフトボール連盟にて業務を始め、2001 年から 2016 年までは同連盟の会長を務めた。WBSC の会長となったのは 2014 年からで、現在も同職についている。
20) World Baseball Softball Committee『Baseball 5』https://baseball5.wbsc.org/（最終閲覧日 2020/07/22）
21) Olympics「Cuatro Esquinas: The Basics of Street Baseball In Havana | Arriba Cuba』https://www.youtube.com/watch?v=xYjnA_57Qvc（最終閲覧日 2022/12/21）
22) 読みやすさのためにカッコ内は筆者が補完した。Olympics「Cuatro Esquinas: The Basics of Street Baseball In Havana | Arriba Cuba』https://www.youtube.com/watch?v=xYjnA_57Qvc（最終閲覧日 2022/12/21）
23) brentmcd「Cuatro Esquinas - street baseball in Cuba」https://www.youtube.com/watch?v=s1k6Cvwg5sU（最終閲覧日 2022/12/21）
動画の概要欄には、以下のように説明が付されている。(筆者訳)
キューバのシエンフエゴス（キューバの中央部南岸、首都ハバナから 250km 程度離れた地方都市）でストリートベースボールやクアトロエスキーナス（四つ角）をする子供たちのグループ。 プレートでのプレー。 落球。エラー、ホームラン。バットもグローブもなく、ハンドボールと同じような感覚でプレーしているのが面白い。楽しそうだ。2009 年 12 月撮影。
24) RedBull 社は、エクストリームスポーツやモータースポーツの普及・啓発に力を入れており、競技そのもののスポンサード、大会への出資、選手へのスポンサードなど、さまざまな方法でエクストリームスポーツやモータースポーツ、ストリートスポーツを支援している。
25) Red Bull「The Cuban version of baseball - Red Bull 4Skinas」https://www.youtube.com/watch?v=AYRh-Bd1ohA&t=78s（最終閲覧日 2022/12/21）
26) Baseball 5「Rule 公式 WBSC ベースボール 5 ルール」https://www.baseball5.jp/about/rule.html#preparation（最終閲覧日 2022/12/22）
27) 三谷舜、2022
28) 三谷舜、2022
29) アレン・グットマン、1978=1981、31-95 頁、リー・トンプソン、2010、209-218 頁より筆者作成
30) 市井吉興、2019
31) 三谷舜、2021
32) 三谷舜、2022
33) 早川武彦、1993、22 頁

34）早川武彦、1993、22 頁
35）市井吉興、2020a、79 頁
36）Palmer and Larson、2015

参考文献

市井吉興、「「創造的復興」と延期された 2020 東京オリンピック――例外状態・ニュー・ノーマル・ライフスタイルスポーツ」、『大原社会問題研究所雑誌』、742、法政大学大原社会問題研究所、2020a、67-83 頁
市井吉興、「「ニュースポーツ」とスポーツツーリズム―スポーツツーリズムの資源としての「ニュースポーツ」の可能性とは？」、『観光学評論』、8（1）、観光学術学会、2020b、71-83 頁
市井吉興、「「アーバンスポーツ」と二〇二〇東京オリンピック――国際オリンピック委員会が期待する「スポーツの都市化」とは何か？」、『唯物論研究年誌』、24、唯物論研究協会、2019、170-182 頁
市井吉興、「スポーツを「闘争のアリーナ」として読み解く――エリアス・ブルデュー・ハーグリーヴスのスポーツ研究を導きに――」日暮雅夫、尾場瀬一郎、市井吉興編著『現代社会理論の変貌 せめぎ合う公共圏』ミネルヴァ書房、2016、127-148 頁
石原豊一、「うどん県･高松のど真ん中にボールパークを造ろう！」『スポーツ産業学研究』27（1）、日本スポーツ産業学会、2017、107-110 頁
石原豊一、「世界中で進む球場のイノベーションとしての「ボールパーク」～韓国における新球場の事例を中心に～」『ベースボーロジー』14、野球文化学会、2021、37-61 頁
大坪正則、「ニューヨークのスタジアム風景」『現代スポーツ評論』13、創文企画、2005、116-121 頁
笹川スポーツ財団、『スポーツ白書 2020 2030 年のスポーツのすがた』笹川スポーツ財団、2020
清水諭、「パンパシフィックにおける野球の政治学」『現代スポーツ評論』13、創文企画、2005、8-19 頁　杉本尚次、「ベースボール・スタジアムと都市環境：スポーツ地理学」『人文論究』49、関西学院大学人文学会、1999、1-19 頁
関朋昭、「勝利至上主義に対する批判の反証：スポーツの定義と価値から」『北海学園大学経営論集』17（3）、北海学園大学経営学会、2020、117-129 頁
早川武彦、「近代スポーツから現代スポーツへの胎動：そのラフスケッチ」『研究年報』一橋大学スポーツ科学研究室、1993、20-26 頁
三谷舜、「「スポーツの都市化」が近代スポーツに与えるインパクトとは？：アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」の文化社会学的考察」、『立命館大学人文科学研究所紀要』、126、立命館大学人文科学研究所、2021、147-170 頁
三谷舜、「パルクールジムにおける「環境の用具化」：パルクールにおけるスタイルと環境

の考察に向けて」『立命館大学人文科学研究所紀要』、130、立命館大学人文科学研究所、2022、111-136 頁

Guttmann, Allen,『*From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*』Columbia University Press, New York, 1978（＝清水哲男訳、『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ、1981）

Jeffrey L. Kidder,『*Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*』, Rutgers University Press, New Jersey, 2017（＝市井吉興、住田翔子、平石貴士監訳『パルクールと都市：トレイサーのエスノグラフィー』ミネルヴァ書房、2022）

Palmer, Clive and Larson J. Mitchell,「"When（or how）do the Olympics become 'stale'?"」『*Sport in Society*』18（3）, Routledge, London, 2015, 275-289 頁

Wheaton, Belinda,『The Cultural Politics of Lifestyle Sports』Routledge, London, 2013（＝市井吉興、松島剛史、杉浦愛監訳、『サーフィン・スケートボード・パルクール ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版、2019）

World Baseball Softball Committee『Baseball 5 Rules』https://static.wbsc.org/wp-content/uploads/baseball5-rules-eng.pdf（最終閲覧日 2022/12/22）